

イシイルカ 太平洋・日本海・オホーツク海

Dall's porpoise *Phocoenoides dalli*

イシイルカ型



リクゼンイルカ型



管理・関係機関

水産庁、漁業道県

生物学的特性

- イシイルカ型とリクゼンイルカ型の2型
- 最大体長・体重：2.1 m（上顎先端～尾鰭分岐点）・220 kg
- 寿命：15～20 歳（詳細は未解明）
- 性成熟年齢（平均）：雄 4.5 歳、雌 3.8 歳
- 繁殖期・繁殖場：晩春から夏（成熟雌は1～2年毎に出産）、オホーツク海
- 索餌期・索餌場：周年・北海道沿岸、オホーツク海、三陸沖
- 食性：ハダカイワシ類、スケトウダラ
- 捕食者：シャチ

利用・用途

刺身、煮物等

漁業の特徴

北海道、青森県、岩手県及び宮城県で知事許可漁業として突棒漁業が許可されている。捕獲頭数は岩手県船が卓越し、2011年の震災以降は北海道沿岸での捕獲がほとんどない。岩手県船の操業は従来5～6月に北海道日本海沿岸と9～10月にオホーツク海沿岸あるいは道東太平洋沿岸の港を基地とし、11～4月に三陸沖で行われてきたが、現在は三陸沖での操業に限られている。

漁獲の動向

年間捕獲頭数は、1987年以前は2万頭以下であったが、商業捕鯨モラトリアム以降は鯨肉の流通不足を補うためか、1988年に捕獲頭数が4万頭以上へ急増した（この年までは、2つの型が統計上区別されていない）。その後は1993年の捕獲枠導入によって両型合計1.5万頭程度の水準が続いたが、浜値低迷と燃油高騰等で操業が縮小し、2000年代に入ると1万頭程度に留まる年も見られるようになった。東日本大震災の影響で2011年以降は操業隻数が少なくなったため、2023年のイシイルカ型の捕獲頭数は0頭、リクゼンイルカ型も109頭にとどまった。

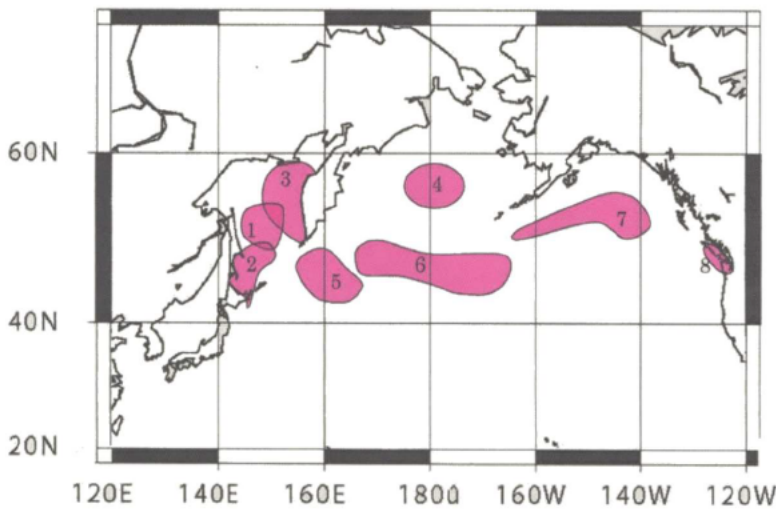
資源状態

両型の資源水準については、調査海域の制限や操業形態等の変化があり、調査継続中である。オホーツク海主要部では、資源量に統計的に有意な傾向は見いだせない。近年の捕獲は、上記経済的な理由や震災の影響もあり、許容捕獲頭数を大きく下回っており、過剰漁獲でも乱獲状態でもない。

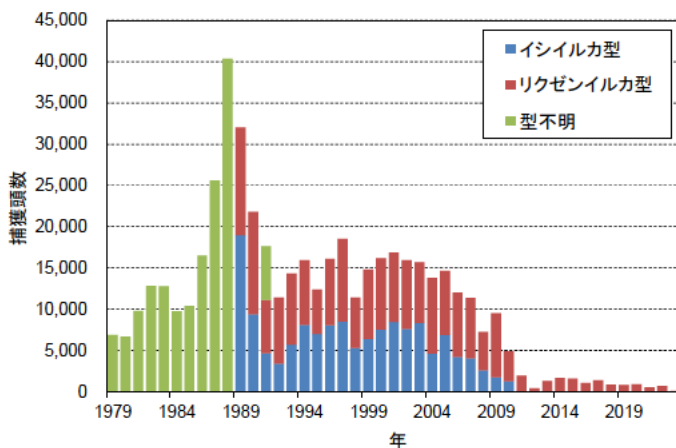
管理方策

小型鯨類の内的自然増加率は4%程度とされているが、出産間隔から本種の高い繁殖力が分かっており、6～8%の内的自然増加率を基に1993年より捕獲枠が設定されている。また、道県知事による許可のもとで漁業が行われており、操業海域の許可制、漁期が設定されている。水産庁は2007年から本種の管理にPotential Biological Removal (PBR) の概念を適用して許容捕獲頭数を算出し、その範囲内で捕獲枠を設定している。

イシイルカ（太平洋・日本海・オホーツク海）の資源の現況（要約表）	
世界の漁獲量 (最近5年間)	我が国以外では商業利用されていない
我が国の漁獲量 (最近5年間)	イシイルカ型（日本海-オホーツク海系群） 0~4頭 最近（2023）年：0頭 平均：1頭（2019~2023年） リクゼンイルカ型 109~928頭 最近（2023）年：109頭 平均：611頭（2019~2023年）
資源評価の方法	ライントランセクト法に基づく目視調査データ解析から資源量を推定する。
資源の状態 (資源評価結果)	イシイルカ型（日本海-オホーツク海系群）：17.4万頭（CV=0.212、2003年） リクゼンイルカ型：17.8万頭（CV=0.232、2003年） 現在の捕獲頭数は許容漁獲頭数を大幅に下回っていることから過剰漁獲でも乱獲状態でもない
管理目標	現在の資源水準の維持
管理措置	操業海域の道県知事による許可制（体色型別捕獲枠、年間5~6か月の漁期、捕獲統計）
管理機関・関係機関	水産庁、漁業道県
最新の資源評価年	捕獲対象系群の主要生息域（オホーツク海と北西太平洋）： 1989~1990年の調査データに基づき各年の資源量推定値を1991年に発表（Miyashita 1991） オホーツク海全域：2003年の調査データに基づき資源量推定値を2007年に発表（宮下ほか 2007） オホーツク海中西部：1990~2010年の調査データに基づき 各年の資源量推定値を2015年に発表（Kanaji <i>et al.</i> 2015）
次回の資源評価年	2014~2016年の調査データに基づき道東沿岸域の各年の資源量を 公表したことから、次回については検討中。



北太平洋のイシイルカの分布
1はリクゼンイルカ型系群
2はイシイルカ型の日本海-オホーツク海系群、
3~8はイシイルカ型他系群の各繁殖海域。



イシイルカ捕獲頭数の推移（1979~2023年）